The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代英語期における「promise＋目的語＋to不定詞節」と「promise＋目的語＋定形節」の交替について
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪大学英米研究. 2021, 45, p. 65-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99458
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代英語期における「promise＋目的語＋to 不定詞節」と「promise＋目的語＋定形節」の交替について

大津　智彦

1　導入

1.1　調査の目的

筆者は（a）のように「promise＋目的語＋to 不定詞」の形をとる構文と（b）のように「promise＋目的語＋定形節」の形をとる構文の交替に関し、大津（2019）おいてまずはその起源を確認し、両構文が現れる最初期に当たる初期近代英語期における実態を The Parsed Corpus of Early English Correspondence（PCEEC）のなかでも動詞 promise が頻出する口語に近い使用域の特徴を示す私信での調査を行った。

（a）Sam promised me to get some food.

（b）Sam promised me that he would get some food.

次に大津（2020）おいては後続する時代として後期近代英語期における発展を The Corpus of Late Modern English Texts（CLMET）version 3.1 を用いて調査したが、この際、大津（2019）との連続性を鑑みテキストジャンルのうち同じ私信である Letters を用いるとともに、用例数を増やすため口語的であると考えられる Drama も検索対象とした。

上記二つの調査の結果を歴史的に順を追って記すと、①「promise＋目的

語」に続く補文節は最初期から不定詞節が過半数を超えるくらい高い頻度で現れる、②不定詞節の頻度はその後も増加し続け、初期近代英語期末（1710年）までに 8 割以上を占めるようになる、③これらのことから、初期近代英語期には母語話者において不定詞節の容認度は高かった、④後期近代英語期においては不定詞節の勢いが鈍化した。例えば 1850-1920 における不定詞節の比率は 58% と初期近代英語期の 8 割以上に比べ減少の兆候を示している、⑤特に副詞類の挿入がある場合、不定詞節の大幅に減少している。これは副詞類の挿入という不定詞節が使いにくい環境において、言い換えれば不定詞節にとって苦手な環境から不定詞節を避ける傾向が既に後期近代英語期から始まっていたと推察できる、といった点を明らかにした。ではこれに続く時代、つまり大津（2020）で境界となった 1920 年以降においてこの問題はいかなる様相を見せるかを観察するのが今回の調査目的である。

2　調査方法

2.1　The Movie Corpus

この研究では大津（2019、2020）と同様に動詞 promise に続く補文節の交替を口語的なジャンルのテキストを使って調査するため、Mark Davies が English-Corpora.org で公開している The Movie Corpus を利用した。このコーパスを用いた研究はまだあまり見られないのでその概要を述べておきたい。The Movie Corpus は 1930-2018 に制作された 25,000 の映画のスクリプトからなる合計約 2 億語のコーパスである。口語のコーパスとしては他に例を見ないくらい大規模であるうえに、Davies によると “the corpora also contain extremely informal language. In fact, in many cases it is more informal than the language in actual spoken corpora, like the Spoken portion of the BNC.” として、非常にくだけた性質を有している点を強調しているとともに、“Evidence for the highly informal nature of the corpora extends to syntax as well.” とあり[1]、それが統語にも及んでいると記している。The Movie Corpus の年代別、国別

表 1　The Movie Corpus の構成[2]

	US/CA	UK/IE	AU/NZ	Misc	TOTAL
1930s	6,013,722	445,980	2,245	104,255	6,566,202
1940s	8,679,722	1,077,429	——	51,151	9,808,302
1950s	8,570,819	1,826,174	21,777	197,173	10,615,943
1960s	5,851,067	2,687,175	6,594	557,976	9,102,812
1970s	6,972,688	2,060,309	112,715	958,968	10,104,680
1980s	10,739,129	2,153,349	308,640	917,461	14,118,579
1990s	19,259,078	2,983,322	384,607	1,986,577	24,613,584
2000s	38,572,824	6,970,252	793,610	4,893,749	51,230,435
2010s	48,649,187	8,705,479	1,337,876	4,626,223	63,318,765
TOTAL	153,308,236	28,909,469	2,968,064	14,293,533	**199,479,302**

の語数は表 1 の通りである。この調査では大津（2019、2020）との連続性を維持するため UK/IE を選択し、1930 年代から 2010 年代までの合計約 2,900 万語を検索した。

2.2　コーパスの検索

コーパスの検索は The Movie Corpus のウェブページで提供されている機能を利用した。より具体的には、English-Corpora.org で共通して用いられる query syntax を使い、動詞 promise のすべての屈折形についてその目的語に代名詞および名詞を取る用例を検索した[3]。その後、代名詞に関しては検出されたすべての用例、名詞に関しては同一の名詞で最高 11 例（your mother）から最低 2 例（my wife など）まで検出された用例すべてから手作業で対象となる構文に合致する用例を抽出し、抽出された用例に対して、年代、補文の種類（不定詞節か定形節か）、主語・目的語の種類、時制、命令文か否か、などのパラメーターに関する情報をカード型ソフトウェア（ファイルメーカー Pro）に入力していった。なお、前回と同様に、主節の主語と補文節の主語が異なる場合は不定詞節と定形節の交替が不可能なので対象から外した。また、これも前回と同様に promise が分詞になっている場合も対象から外し

た。

3　調査結果

3.1　年代別分布

目的語が代名詞と名詞の場合に差が現れるかを確かめるため query syntax において両者を別々に検索したので、それぞれが目的語である場合の結果を表2と表3に定形節（that 節とゼロ接続詞節）と不定詞節の年代別分布として集計した。表1で見たように The Movie Corpus は1930年代から2010年代まで10年刻みで検索が可能であるがセル毎の用例数が小さくなるので30年刻みでまとめている。

大津（2019）では初期近代英語期の最終枠1640-1710における不定詞節の比率が81%であるのに対し、大津（2020）では後期近代英語期の最終枠1850-1920の同比率は53%となっており、不定詞節の比率が大幅に減少していることを観察した。そしてそれは2000年前後から定形節を選択する母

表2　定形節と不定詞節の年代別分布：目的語が代名詞

年代	(a) 定形節	(b) 不定詞節	合計 (a+b)	(b)/(a)+(b)(%)
1930-1959	32	9	41	22
1960-1989	58	8	66	12
1990-2018	204	9	213	4
合計	294	26	320	8

$\chi^2 = 16.2507$ P 値 = 0.000295943

表3　定形節と不定詞節の年代別分布：目的語が普通名詞

年代	(a) 定形節	(b) 不定詞節	合計 (a+b)	(b)/(a)+(b)(%)
1930-1959	2	1	3	33
1960-1989	8	1	9	11
1990-2018	11	1	12	8
合計	21	3	24	13

語話者が多いと指摘され始めた傾向の萌芽が2000年よりもずっと以前に始まっていたことを示唆するものと見たが、今回の調査結果である表2と表3は不定詞節の漸減を示しており、現代英語期においても定形節を好む傾向がさらに進行したことが分かる。

以下に現代英語期について掘り下げた分析を試みたい。表3の目的語が名詞の場合は上記の傾向を示しているものの用例数が少ないので、用例数も多く、統計的有意性も認められた表2の目的語が代名詞の場合を取り上げ考察する。先に述べたように後期近代英語期最終枠1850-1920の不定詞節の比率は53%であるが、表2では1930-1959において同比率が22%である。この近接する年代で不定詞節が31%も減少したことになるが、これは部分的には両者間のコーパスの違いによるものであると思われる。前者はCLMET 3.1のLettersとDramaをコーパスとし、口語的であると言っても特にLetters は筆記されるジャンルであるのに対し、後者は映画であり、口から発せられることを前提としている。口頭で発せられる場合の方が不定詞節は避けられ、定形節がより好まれるためThe Movie Corpusでは不定詞節が大幅に減少したと考えうるのである。この点については後で詳細に考察する。さらに年代を下ると不定詞節の比率は1960-1989では12%と比較的大きな幅で下降し、1990-2018ではついに4%と一桁台にまで落ちる。ここで思い出すべきなのは、この1990-2018という年代が、高見（1999）、Takaie（2002）、鷹家・林（2004）、久野・高見（2017）などが「promise＋目的語＋to不定詞」の形をとる構文を容認しない母語話者が多いことを指摘し始めた時期ときれいに重なる点である。例えばもっとも最近の久野・高見（2017：227-231）は主に学習者用の英英辞典も調べて、1970年代には不定詞構文が用例に挙がっていたのに、2000年以降出版されたものには記載がないとし、これは大量の言語統計が使えるようになったため頻度数の少ない構文パターンは記載されなくなってきたからではないかと推察し、日本人は定形節を用いた構文パターンを使用するのが無難であると勧めている。つまり、表2の1990-2018における8%という数字はその年代の語法の実態を示すととも

に、これらの研究者たちの指摘を具体的に立証した形になっているのである。しかしながら、久野・高見（2017 : 231）は「約4割の人がこの構文パターンをまったく問題がなく、文法的で的確な文だと判断していることもまた事実です。〔中略〕しかも鷹家・林（2004）の6年後の調査が、この構文パターンが急速に消え失せようとしているしている構文ではなく、安定した比率の使用者を維持していることを示しています。したがって、この構文パターンは不適格なわけでも非標準的なわけでもなく、的確で容認可能であるということを最後に強調しておきたいと思います。」としている。だが注意すべきなのは、鷹家・林（2004）や久野・高見（2017）が挙げる約4割という数字は英語の母語話者に不定詞節を使うかどうか、あるいは容認できるかどうかをアンケート形式で問い合わせた結果であり、使用実態を反映したものではない。容認するかどうかと実際に使うかどうかは別ものであり、21世紀の現代英語においては「promise＋目的語＋to 不定詞」の実際の使用率は思いのほか低い可能性が高いことに言及しておきたい。

3.2 「promise＋目的語＋定形節または不定詞節」構文の使用の実態と不定詞節減少の理由

では、なぜ不定詞節の比率は1640-1710における81％から1850-1920の53％、そして1990-2018には4％まで下がったのであろうか[4]。大津（2019 : 64-65）において初期近代英語期における不定詞節の比率の高さについて「Visser（1973 : 2235）は“verb＋object/subject＋infinitive”の形式が中英語および近代英語において広範囲に激増したと記しているが、promise もこの時期の不定詞節の勢いに影響を受けていたものと思われる」と説明した。しかし、persuade、advise、convince などとは異なり、promise は唯一例外的に不定詞節の意味上の主語が主節の目的語ではなく主語と一致する。この点が英語話者にとって混乱の種となり、promise の補文節の主語が何であるかを明示できる定形節が好まれるように変化していったとするのは合理的な理由であろう。しかしそれが唯一の理由であろうか。他にもこの変化に貢献した理

由があるのではないだろうか。以下において The Movie Corpus から抽出された例文を詳細に観察しながらその可能性に関して考察してみる。

まず表 2 と表 3 を比較して分かるように表 2 の目的語に代名詞を持つ用例数の方が圧倒的に多い。表 3 を集計するにあたっては上に「同一の名詞で最高 11 例（your mother）から最低 2 例（my wife など）まで検出された用例」を考慮に入れた旨を記したが、その制限に関係なく目的語が代名詞の用例の方が圧倒的に多いのである。では動詞 promise は目的語が代名詞あるいは名詞の場合に実際にどのように使われているのだろうか。そのあたりの実情を明らかにすることによって補文節に定形節が選ばれるようになってきた新たな理由が発見できる可能性があるのである。

表 2 と表 3 の比較から動詞 promise が目的語を伴う構文ではその目的語は代名詞の場合が圧倒的に多いことは上に述べたとおりである。そしてその差は直近の 1990-2018 において一番大きい[5]。言い換えると、現時点で動詞 promise は目的語を伴う場合、代名詞の目的語とともに用いる用法が主流なのである。その代名詞とともに用いる用法を詳細に分類したものが表 4 である。

表 4 から分かるように、少なくとも今回の調査結果に関する限り目的語の代名詞は you か me のみで、また、現在形で現れる場合が圧倒的に多く、なかでも「現在形プラス目的語 me」の組み合わせがずば抜けて多い（134 例）。これは何を意味するのか。「現在形プラス目的語 me」134 例の組み合わせの内訳を見ると 105 例までが命令文である。実例を下に 3 つ挙げる。

表 4　1990-2018 における用例の分布：目的語が代名詞

	you	me	その他	合計
現在形	44	134	0	178
過去形	9	22	0	31
未来形	0	4	0	4
合計	53	160	0	213

（1）Promise me that you'll never do that again.　(1999年)
（2）Promise me you're gonna let me cut your hair.　(2009年)
（3）Promise me you'll turn this party around.　(2003年)

命令文であるから定形節の主語はyouで時制は未来である点は共通している。ちなみに1990-2018の間に不定詞節が続く命令文の用例は2例あった。

（4）Just promise me to drop her over the side when you're done.　(2008年)
（5）Promise me to tell her she's safe.　(2007年)

1990-2018において目的語が代名詞の場合、全用例の半数近くが目的語にmeを取る命令文で、命令の内容が定形節で表されている点に注目しなければならない。なぜ、命令文では（4）や（5）のように不定詞節を取らずに定形節を選ぶのであろうか。この問いに答えることを試みる前に表2において次に頻度の高い、目的語がyouで主節が現在形の場合の構文パターンを見てみる。合計44例のうち定形節を取るものが43例あり、そのうち3例だけ挙げる。

（6）I promise you I'll get you sorted.　(1997年)
（7）I promise you now that I will never, ever be unfaithful again.　(1998年)
（8）I promise you, I won't let him hurt you ever again.　(1997年)

ちなみに1990-2018の間に主節が現在形で不定詞節が続く用例は次の1例である。

（9）I promise you not to come in here when I'm menstruating.　(2005年)

なお、定形節、不定詞節を問わず、主節の主語は全44例において一人称単

数の I である。つまり、すべての用例が“I promise you”で始まる遂行動詞として用例である。

promise が遂行動詞として働く場合、なぜ従属節が定形節になるケースが圧倒的多数を占めるようになったのだろうか。その答えは遂行動詞によって遂行する内容の明示性に鍵があると思われる。例えば（7）が不定詞節を取る（7）’のような形に変えるとどうであろうか。

（7）’I promise you now to never, ever be unfaithful again.

この場合、従属節の明示性が下がるため背景化されてしまい、「約束する」という行為自体が前面化され重要であるという印象が生まれる。別の言い方をすれば、とにかく約束することが大事でその内容についてはそれほど重視していないという響きが出るのではないか。約束する内容を明示的な定形節で表現する方が明らかに約束する内容について責任を持つという意思が感じられる。同様のことは（8）についても言える。（8）では I promise you のあとにコンマが置かれている点に注目したい。The Movie Corpus においては I promise you の後にコンマが置かれる場合と置かれない場合が混在しており、その選択はそれぞれの映画のスクリプトの作成者が恣意的に行ったものであると考えられる。いずれにしても、このコンマは一拍置いて、約束内容をわざわざ定形節で直接話法のように導く役割を果たしており、このようなケースにおいては約束するという行為と同等かそれ以上に約束内容に焦点が置かれる。その証拠に（11）のように I promise が後置されている例文が The Movie Corpus のなかに多数見られるのである[6]。

（10）I'll get you there, I promise you.　　（2001 年）

これは“I'll get you there”と発話した時点でそれ自体が約束という発話行為であり、後置された“I promise you”はその行為の意味の確認のため付け足

されたものである。逆に“I promise you,”がコンマ付きで前置されている場合は約束という発話行為をこれから行う予告の役割を果たしていると考えられる。いずれの場合も、約束の内容を発話行為として定形節で明示的に表現することに主眼を置いており、それにより約束に対する誠実性が伝わる。

今、(7)－(8) に関して述べたことは (1)－(3) の命令文にも通じる。つまり、(4) や (5) のように Promise me の後に不定詞節が続けば「約束すること」に焦点が置かれ、約束の内容が内容が背景化され、とにかく約束さえすればいいという印象を伴う命令文になるのに対して、定形節を用いて約束内容を明示すれば、その履行まで見据えた命令文と言える。

以上のことから、全用例数の過半数以上を占める命令文や I promise you のような遂行文において従属節が定形節になる頻度が歴史的に増加してきた理由は、「約束する」という行為の中身を担保する目的にあるのではないかと推察されるのである。要するに、命令文では約束を命令するからにはその約束内容を明確に伝えたい、遂行文では約束するからにはその約束内容について誠実でありたい、という気持ちからより明示的な定形節に移行するようになったのではないかと思われるのである。

3.3　目的語が名詞の場合について

ここまで目的語が代名詞の場合について検討してきた。次に抽出できた用例数は少ないが目的語が名詞の場合も見ていきたい。表 3 で見たとおり目的語が名詞の場合においても年代を追うごとに不定詞節の頻度が減少し、定形節がより頻繁に用いられるようになってきた。ただし、目的語が名詞の場合に特徴的なのは、今回の調査で抽出できた用例に限って言えば、主節の時制がすべて過去であることである。また、主節の主語は 24 例中 22 例が I、1 例が we、残り 1 例が人名である。しかしながら、目的語が名詞の場合の promise 構文において、主節の時制が過去になるのは今回の調査に限ったことではなく、一般的な現象であろう。なぜならば、目的語が名詞ということはそれは第三者であり、第三者に対して現在形で約束するという状況は皆無

とは言わないまでも考えにくいからである[7]。次に定形節の用例を 2 例挙げる。

（11）I promised your mother I'd keep a proper eye on you.　（2014 年）
（12）I promised my friends I wouldn't be late.　（1998 年）

不定詞節の例も 1 例だけ挙げておく。

（13）I promised my mother to help.　（2000 年）

過去形ばかりであるから当然、命令文や遂行文の用例は 1 例もない。よって定形節が増加した理由についてセクション 3.2 で命令文や遂行文に関して用いた推論をここにそのまま適用することはできないが、第三者（名詞で表される相手）に何らかのことを約束したという事実を記述する場合でも、その約束の事実だけではなく約束内容を明示すべきであるという意識のため定形節を用いるのかもしれない。あるいは目的語が代名詞の場合に定形節が来るケースが圧倒的に多いため、単にその類推が働いているという可能性もある。確定的ではないが現時点では以上 2 点が目的語が名詞の場合に定形節の比率が増加した理由であると考えている。

4　まとめ

本論文は大津（2019）、大津（2020）に引き続き「promise＋目的語」に続く補文節の変遷について現代英語期（1930 年代から 2010 年代まで）について調査したものである。前回までの調査で「promise＋目的語」に続く補文節は初期近代英語期末（1710 年）に不定詞節が 8 割以上を占めるまで増加し頂点を迎えた後、後期近代英語期末には 53% まで減少を見せたことを観察したが、今回の調査では不定詞節はその後も徐々に比率を減らし 1990-

2018 には promise の目的語が代名詞の場合は 4%、名詞の場合は 8% にいたるまで減少したことを確認した。この減少の原因を探るため用例をいくつかのパラメータによって分類したところ、直近の 1990-2018 では、①用例の大部分が現在時制で目的語に代名詞を取り、②そのなかでも “Promise me” で始まる命令文と “I promise you” で始まる遂行文が圧倒的多数を占め、③命令文 105 例のうち 103 例、遂行文 44 例のうち 43 例がが補文節に定形節をとる、ということが分かった。つまり、「promise＋目的語」に続く定形節が増加し、不定詞節が減少したのは The Movie Corpus という現実に近い口語の場面において命令文か遂行文の用例数の多さが大きな原因となっているのである。そして promise を動詞とする命令文や遂行文において定形節が好まれるようになった理由に関しては、定形節の明示性という観点から説明を試みた。つまり、命令文においてはただ約束させるということだけではなく、約束において実行しなければならない行為を明らかにし、遂行文ではただ約束するというだけではなく約束する内容を明白にするためには不定詞節よりも定形節の方が適切であるため後者が選択されるケースが増したのではないかと推論した。ここで注意したいのは、セクション 3.2 で述べた「persuade、advise、convince などとは異なり、promise は唯一例外的に不定詞節の意味上の主語が主節の目的語ではなく主語と一致する。この点が英語話者にとって混乱の種となり、promise の補文節の主語が何であるかを明示できる定形節が好まれるように変化していった」とする原因と、今回の推論は明示性という概念で重なる部分はあるが同じではないという点である。つまり、カッコ内の原因は一般論として受け入れた上で、今回の推論では命令文や遂行文においてはその明示性の必要性が通常よりも高くなることを指摘している。

注

1　https : //www.english-corpora.org/files/tv_movie_corpora.pdf より。(2020 年 12 月 25 日参照)

2　同上。

3　目的語が代名詞の場合の quiery syntax は［promise］.［v*］［pp*］、名詞の場合は［promise］.［v*］＊［nn*］である。

4　1990-2018 の 4% は promise の目的語が名詞と代名詞の場合を合算して計算した。(9＋1)÷(213＋12)　≒0.44

5　代名詞の名詞に対する倍率は、1990-2018 は 213÷12≒18、1960-1989 は 66÷9≒7、1930-1959 は 41÷3≒14 となる。

6　今回の調査ではこのパターンの構文はカウントしていない。

7　promise の目的語が名詞の場合、主節の時制は過去形か未来形がありうる。今回、過去形の用例しか現れなかったのは、約束した事実を振り返るという場面が現実の世界で圧倒的に多いからであろう。

参考文献

De Smet, Hendrik, Susanne Flach, Jukka Tyrkkö & Hans-Jürgen Diller (2015) *The Corpus of Late Modern English (CLMET), version 3.1 : Improved tokenization and linguistic annotation.* KU Leuven, FU Berlin, U Tampere, RU Bochum. Available from https://perswww.kuleuven.be/~u0044428/clmet3_1.htm.

Davies, Mark. (2019-) *The Movie Corpus.* Available online at https://www.english- corpora.org/movies/.

久野暲・高見健一 (2017)『謎解きの英文法　動詞』くろしお出版.

久保田正人 (2001)「promise の意味と構造」『言語文化論叢』第 9 号：39-55. 千葉大学.

西原俊明 (2000)「主語コントロール動詞について－promise, beg, ask を中心として－」『長崎大学教育学部紀要－人文科学－』No.61：47-56.

大津智彦 (2019)「初期近代英語期における「promise＋目的語＋to 不定詞」と「promise＋目的語＋that 節」の交替について」『英米研究』第 43 号：59-71.

大津智彦 (2020)「後期近代英語期における「promise＋目的語＋to 不定詞」と「promise＋目的語＋that 節」の交替について」『英米研究』第 44 号：61-71.

Parsed Corpus of Early English Correspondence, text version. 2006. Compiled by Terttu Nevalainen, Helena Raumolin-Brunberg, Jukka Keränen, Minna Nevala, Arja Nurmi and Minna Palander-Collin, with additional annotation by Ann Taylor. Helsinki : University of Helsinki and York : University of York. Distributed through the Oxford Text Archive.

Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Longman.

Rohdenburg, Gunter (1995) "On the Replacement of Finite Complement Clauses by Infini-

tives in English." *English Studies,* Vol.4 : 367-388.

Rohdenburg, Gunter (2006) "The Role of Functional Constraints in the Evolution of the English Complementation System." Syntax, Style and Grammatical Norms : English from 1500-2000 ed. by Christiane Dalton-Puffer, Dieter Kastovsky, Nikolaus Ritt, and Herbert Schendl, 143-166. Bern : Peter Lang.

Takaie (2002) "A Trap in Corpus Linguistics : the Gap between Corpus-based Analysis and Intuition-based Analysis." In T. Saito, J. Nakamura and S. Yamasaki (eds) *English Corpus Linguistics in Japan.* Amsterdam : Rodopi.

鷹家秀史・林龍次朗 (2004)『103 人のネイティブスピーカーに聞く生きた英文法・語法』旺文社.

高見健一 (1998)「John promised Mary to leave. は「正用法」か」『英語青年』第 144 巻 第 4 号：200-201.

Visser, F. Theodorus (1973) *An Historical Syntax of the English Language.* Part III, second half. Leiden : Brill.

吉川寛 (1985)「「Promise」考」『国際関係学部紀要』1 号：105-113. 中部大学.